

西澤文隆の庭園研究における建築の視点に関する研究

桂離宮意匠論の比較を通して

A Study on Architectural Perspectives in Fumitaka Nishizawa's Garden Research

Through a Comparison of Katsura Rikyu Design Theories

○田中栄治（神戸女子大学）*1

*1 Eiji TANAKA, Kobe Women's University, 2-1Aoyama Higashisuma, Suma-ku, Kobe, 654-8585, e-tanaka@suma.kobe-wu.ac.jp

キーワード: 西澤文隆, 庭園研究, 建築の視点, 桂離宮, 森蘊

1. はじめに

本稿は、建築家西澤文隆（1915-1986）の建築思想の全体像について総体的かつ相対的に、その特質を明らかにする研究の一環である。

西澤は、ル・コルビュジエのもとで建築を学んだ坂倉準三が1940年に創設した坂倉準三建築事務所の最初の所員となり、坂倉の没後は彼の意志を継承して坂倉建築研究所を率いた。西澤の建築思想の特徴は、コルビュジエから坂倉へとつながる近代建築の精神を基礎とし、日本や世界の伝統的な建築や庭園の研究および日本庭園の実測を通して、自然や伝統を手がかりとして建築の本質を掴み取り、自身の血肉とした上で、そこから得た合理性に基づき頭ではなく体で現代建築を設計しようとした点にある。また、西澤の設計活動は、戦前から戦後復興期、高度経済成長期を経てポストモダンの時代にまで及び、この間の近現代建築思潮の流れの中で自身の建築思想を貫き、後年には「Ordinary（普通）」の建築を目指した。1967年に大阪府総合青少年野外活動センターにより日本建築学会作品賞、1985年に神宮前の家ほか一連の住宅により日本芸術院賞を受賞した。



Fig.1 Fumitaka Nishizawa

本稿では、西澤の行った庭園研究のうち、特に桂離宮意匠論^{註1)}に着目し、西澤以前の建築研究者や建築家、庭園研究者などが著した桂離宮の意匠についての文献と西澤の著した文献を比較することにより、西澤の庭園研究における建築の視点の特質を明らかにすることを目的としている。

なお、西澤に関する主な既往研究としては、コート・ハウスを中心とした住宅の設計手法に関する研究、実測を中心とした日本庭園に関する研究、坂倉準三建築研究所および坂倉建築研究所の設計体制に関する研究がある。これまで、西澤の庭園研究における建築の視点を明らかにした研究はいまだ行われていない。

2. 西澤文隆の庭園研究と森蘊の影響

雑誌『庭』に掲載された「庭への履歴書」⁽¹⁾によると、西澤はまず生まれ育った琵琶湖東岸での自然体験を述べ、また大学卒業後に坂倉準三建築事務所で働きはじめたころから、事務所近くの青山墓地で植物図鑑と首引きで木の名前を覚えたとしている。西澤が本格的に庭園に興味を持ちはじめたのは、戦後に関西で仕事をすることになり、「名園名席めぐり」という会に参加して毎日曜毎に京都に見学に出かけ、庭園を歩きまわりながら写真を撮るようになってからのことである。この時に、西澤は庭園と相対してこれぞと思うところを写真に撮ったとし、その結果として建築と庭園の関係に興味を持つようになる。

金澤良春の「両界曼荼羅」⁽²⁾によると、西澤は1953年頃から日本庭園研究者・作庭家であり、生涯にわたって建築と庭園の結びつきの視点を持って研究・作庭した森蘊^{註2)}（1905-1988）と親交を持ち、さらに森の研究の背景にあった藤島亥治郎らの研究が西澤によく知られていた。

1966（昭和41）年に美術出版社から「建築と庭園のかかわり」の本を出すことを依頼された西澤は、当時の建築と庭園の既存図面について、庭園の学者は名園を研究しているだけで建築との関係は考えられておらず、建築の方も同様で、建築と庭園のかかわりを本にすることは稀であるとしている。これをきっかけとして、西澤は日本庭園の実測

をはじめることになる。

ところで、建築と庭園の既存図面については西澤より前に森が同様の意見を持っていた。1960（昭和35）年発行の『日本の庭』⁽³⁾で、森は庭園の実測図では必要以上の時間をかけて現存建築を測り図示したとし、その理由のひとつとして、それまでの建築と庭園の図面について、従来の建築関係の実測図だと建築の部分は正確でも、環境の部分が軽視され勝ちであったし、庭園関係の実測図は建築が杜撰であったとして、共に不完全であると指摘している。森と親交のあった西澤は、当時この文章を読んでいたと考えられ、西澤自身が「建築と庭園のかかわり」の本を依頼された時に森と全く同じ状況に直面したのであろう。その上で、1967（昭和42）年に西澤が実測を開始した時に、西澤は森から実測図の提供を受け、また森の著作から拡大トレースを行って、実測のためのベース図面をつくっている。

また、西澤は1974（昭和49）年に『西澤文隆小論集1 コートハウス論 その親密なる空間』⁽⁴⁾、1975（昭和50）年に『西澤文隆小論集2 庭園論I 庭—その華麗なるもの』⁽⁵⁾、1976（昭和51）年に『西澤文隆小論集3 庭園論II 日本文化のなかで』⁽⁶⁾『西澤文隆小論集4 庭園論III 続・日本文化のなかで』⁽⁷⁾を出版しており（以下、『コートハウス論』、『庭園論I』、『庭園論II』、『庭園論III』とする）、特に『庭園論II』においては、森から庭園図面の提供を受けている。

さらに、日本建築学会の機関誌『建築雑誌』に掲載された「私の感銘の受けた図書」⁽⁸⁾のなかで、西澤は森の『平安時代庭園の研究』を取り上げて、該博な知識とともにつくる喜びが味わえる筆力と構築力は、森がつくる立場を忘れていない証拠であると高く評価している。

一方で、森は『日本の庭園』⁽⁹⁾において、建築家出身の庭園作家の1人として、西澤を関西方面で建築と共にある庭園の佳作を数多く創造していると紹介している。

これらのことにより、西澤と森には研究の面での交流があり、お互いに評価し、西澤の庭園研究に森が影響を与えていたことがわかる。

3. 桂離宮意匠論の変遷

ここでは、西澤以前の建築研究者や建築家、庭園研究者などが著した桂離宮の意匠に関する文献の変遷を概観する。

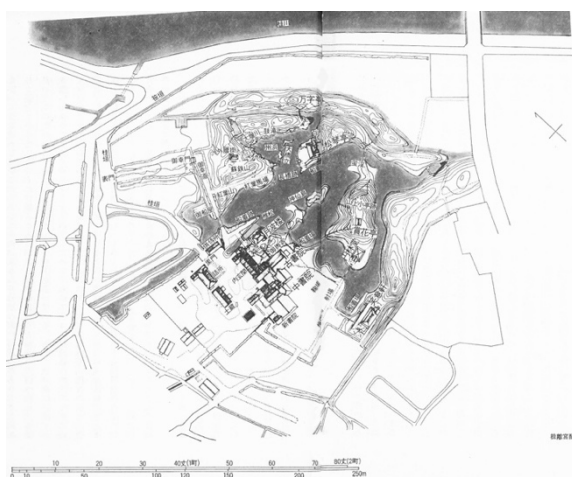


Fig.2 Katsura Rikyu

なお、1955（昭和30）年に東都文化出版から出版された森の『桂離宮』⁽¹⁰⁾（以下、東都文化版『桂離宮』とする）によると、桂離宮に関しては歴史的研究が多いなかで、桂離宮意匠論への最大の貢献は、1933（昭和8）年のブルーノ・タウトの来日であるとし、さらにそれ以前の岸田日出刀の『過去の構成』についても取り上げている。

3.1. 西澤文隆以前の桂離宮意匠論

3.1.1. 岸田日出刀の桂離宮意匠論 1929（昭和4）年に出版された『過去の構成』⁽¹¹⁾は、岸田が集めたり、撮影したりした建築や文様や彫刻などの写真をまとめたものである。この中で岸田は桂離宮を取り上げ、古書院・中書院・新書院からなる書院建築と庭園の配置と構成に着目している。岸田は桂離宮の書院建築と庭園の両方についてその造形と構成を高く評価していた。

なお、森は学生であった1931（昭和6）年から東京帝国大学での岸田による建築意匠の授業を聴講していた⁽¹²⁾。その時に、森が日本の伝統的な建築と庭園を造形と構成の視点から捉える岸田の考えに触れていた可能性がある。

3.1.2. ブルーノ・タウトの桂離宮意匠論 1934（昭和9）年に出版されたブルーノ・タウトの『ニッポン』に「桂離宮」⁽¹³⁾という文章がある。この中でタウトが桂離宮を訪れた時の印象を、パルテノンに比肩すべきものと絶賛した上で、機能主義の立場から見ても現代的である点を高く評価し、さらにタウトは桂離宮の建築と庭園を統一体であるとして、桂離宮の実用的で近代的な面を評価している。タウトは桂離宮の庭園について、多面性と無数の関連が表出されているとしている。ここでタウトのいう多面性とは、古書院からの庭全体の眺めに対して、新書院に面する芝生と樹木だけの庭から、笑意軒さらに園林堂周辺の簡素な庭園と、松琴亭周辺の複雑な庭園との対比を指している。そして、タウトはこれらの庭の各部の多面性は、すべて一個の単位へと結合されており、それは精神的意味における機能的な一つの美が達成されていたとしている。

タウトの桂離宮に対する多面性と無数の関連の美という考え方は、1934（昭和9）年に執筆され、日本語訳が1946（昭和21）年に出版されたタウト著作集第一巻『桂離宮』の「日本建築の世界的奇蹟」⁽¹⁴⁾にも書かれている。

3.1.3. 柳亮の桂離宮意匠論 1942（昭和17）年に出版された柳亮の著書『日本美の創生』に「眞の飛び石 桂離宮の覚え書から」⁽¹⁵⁾という文章がある。ここで柳は、桂離宮は一個の世界観であるとし、平野に山荘を出現させようとする苦心であるとしている。その上で桂離宮の特質は動きと変化であり、それに対応する高い技術と注意深い用意であるとしている。

また、柳は桂離宮の庭園から書院建築を見た時に山荘の趣を求めていることと、御殿内から庭園を見た時に山荘らしい展望を確保する目的のために、桂離宮の御殿の「建ちが低く床が高い」という特徴が作り出されていると指摘している。

さらに、柳は見かつ見られるということ「主客の意識」であるとし、大陸の縦の美学に対する日本人の横の美学においては、この主客の関係の美学が一層切実であるとしている。ここでは、桂離宮の建築から見る美しさと庭園から見られる美しさを同時に把握し解決する点に建築と庭園の関係への意識をみることができる。

3.1.4. 藤島亥治郎の桂離宮意匠論 1945(昭和20)年に出版された『桂離宮』⁽¹⁶⁾で、藤島亥治郎は桂離宮の美は建築と庭園のまとまりにあるとしている。その上で、藤島は桂離宮の庭園がきわめて建築的であるとしており、これは岸田、タウト、柳にはみられなかった視点である。

具体的には桂離宮の御殿から庭園への移り変わり、松琴亭前の庭園、興寄前庭に建築的な取り扱いがみられるとしている。さらに、藤島は建築的な直線構成はその他にも宮苑内のあちこちに見られるとして、松琴亭前の流れの手水鉢に見られる水汀の数段の直線的な石の敷き方、船着場などの具体例を挙げている。

また、藤島は桂離宮がつけられた時代の新しい造形感覚や自然観、さらには生活形態の影響が反映されることにより、新しく独創的な建築と庭園が作り出され、桂離宮は実用目的を完全に達成し得たと同時に至高の美域にも達し得たとしている。

さらに、藤島は桂離宮の建築と庭園の軸の配置が方位に合わせたものではなく、自由に配されている点に着目している。桂離宮の苑内全体を見渡せる古書院月見台からの眺め、特に秋の月の眺めの軸をこの庭園の正式な表であるとし、それぞれから見る庭園の景観が対照的な月波樓と松琴亭とを結ぶ軸を第二の軸としている。これらの軸は池を中心にして東西に置いている陰と陽の相反した副主題を結ぶ方向となっている。これに対して、藤島はもう一つの軸として月波樓北側の岬からの眺めの軸があるとしているが、陰陽両者を左右に並べた形となるこの軸はさほど成功していないとしている。

藤島の桂離宮意匠論では、桂離宮の庭園各部に建築的な取り扱いが見られるとしている点や、古書院月見台からの眺めの軸、および月波樓と松琴亭とを結ぶ軸の考え方に建築と庭園を結びつける視点が見られる。

なお、森は学生であった1931(昭和6)年4月から東京帝国大学で行われていた藤島の日本と西洋の建築史などを聴講していた⁽¹⁷⁾。また、卒業後には藤島邸の庭木を森が選び、運び、植える手伝いをしている⁽¹⁸⁾。また、後年には毛越寺庭園の調査に協力するなど藤島と森の間には交流があった。そして、森は藤島の『桂離宮』を通じ啓発されるところがあったとしている⁽¹⁹⁾。

一方、藤島は『桂離宮』のなかで、文献に関すること、古書院と中書院の建設時期、「御別業之事」に記載されている人々、瓜畑の茶屋などに関しては森の研究を引用して解説をしている。このことから、藤島が森の研究を評価していたことがわかる。

3.1.5. 堀口捨己の桂離宮意匠論 1952(昭和27)年に出版された『桂離宮』⁽²⁰⁾において、堀口捨己は建築家として写真を通して桂離宮の建築と庭園の良さや美しさを表現しようと試みている。

堀口は、特に興寄の前庭や、楽器の間西側の濡縁と中書院西側の縁側の床下から庭園への推移、松琴亭の土庇から周辺の庭園にかけての部分などが、建築的手法を用いて実用的につくられていることに着目し、桂離宮の建築と庭園の美を見出している。これらの視点には藤島や森からの影響をみることができる。

なお、堀口は『桂離宮』のなかで、新御殿の前の芝庭、中沼左京について、智仁親王の馬を好まれたこと、八條宮

妃常照院の手紙、賞花亭と今出川本邸のことなどに関して森の研究を引用して解説をしている箇所がある。このことから、堀口が森の研究を評価していたことがわかる。

一方、森は堀口の著書に自分の研究が参照されていることを喜んでいた⁽²¹⁾。

3.1.6. ワルター・グロピウスの桂離宮意匠論 1954(昭和29)年に来日したグロピウスは、6月7日から7月19日まで京都の伝統的な建築と庭園の見学を行ったが、それを主に案内したのは森である。森はこの時のことを1956(昭和31)年に発行された『グロピウスと日本文化』に「グロピウス博士の日本観 -京都の古建築庭園について-」⁽²²⁾として記している。

その中で、グロピウスの桂離宮意匠論について、森はグロピウスからの書簡として紹介している。グロピウスは、桂離宮の建築は庭園と共に人間のスケールに合わせた建築的空間を形づくる日本人の才能の最高の表現であるとしており、ここでは精神は物質を凌駕していると指摘している。

さらに、グロピウスは桂離宮には日本の住宅建築の模範といてよい時間を超越した近代を発見することができるとし、建築も庭園も一つの連続した空間構成をなしており、室内の空間の連続は、襖や窓によって無限の融通性を示しているとしている。

グロピウスのこの書簡の内容は、1960(昭和35)年に発行された『桂：日本建築における伝統と創造』のなかの「日本における建築」⁽²³⁾にも書かれており、グロピウスは桂離宮について、静止する空間もなければ、対称性も中心の焦点も存在しないと、芸術的な刺激を与える唯一の媒体である空間はふしぎに流動しているように見えるとしている。

3.1.7. 森蘊の桂離宮意匠論 1951(昭和26)年に出版された『桂離宮』⁽²⁴⁾(以下、創元社版『桂離宮』とする)において、森はそれまでの日本の建築や庭園にみられない明るさや、それまでの造園技法にはない新しい試みを行っている点を「桂離宮の近代性」とし、こうした箇所はもはや天然の景色を写した縮景的庭園ではなく、一種の建築であると見るもよく、新しい言葉でいえば戸外室と評してもよいとしており、桂離宮の庭園に建築的な部分があるとしている。

また、森は桂離宮の中でも庭園から建築へのアプローチ、建築より庭園への移り変わり、書院や茶亭などの建築相互間の連絡など、建築とその接触部分に近代的な手法が用いられているとしている。森はこれらを「庭園における建築的意匠」とし、興寄への到達、書院建築周辺、或は又一般には最も自然風景的であるべき、茶亭付近に於ける取扱にも、著しく建築的な意匠の行われていることが、桂離宮の大きな特色として取り上げられるとしている。

森は庭園における建築的意匠を取り上げることで桂離宮の庭園の近代的で建築的・実用的な点を明らかにしようとしており、これらの視点は藤島の『桂離宮』からの影響であると考えられる。

さらに、森は桂離宮における「建築と庭園の関連的合理性」について指摘している。その具体例として、観月の目的と演技の目的を挙げている。観月の目的としては古書院および月波樓の配置および構造と、それらの前面の庭園の取り扱い方に着目している。ここでは、古書院および月波樓から眺める時の月の出から中天するまでの月と、池に映

る月影の動きに合わせて池や築山の形状が決められているとしている。

1955（昭和30）年に出版された東都文化版『桂離宮』は、森が1953（昭和28）年に東京工業大学に提出した学位請求論文『桂離宮の研究』をもとにして、一部構成を変更し加筆したものである。ここでは、建築と庭園の結びつきの視点がより整理されて、創元社版『桂離宮』において「建築と庭園の関連的合理性」としていた箇所については、東都文化版『桂離宮』では「建築と庭園の実用性」と改められ、日常生活の場としての建築と庭園の結びつきについて考察している。さらに、「庭園における建築的意匠」についても、創元社版『桂離宮』において自然風景的な取扱いと対照的に建築的意匠が行われているとしていたのが、東都文化版『桂離宮』では風景的意匠と建築的意匠が渾然一体となって統一されていると表現されている。

1956（昭和31）年に創元社から出版された森の著書『新版 桂離宮』⁽²⁵⁾は、1951（昭和26）年に出版された創元社版『桂離宮』を改訂したものである。この間、森は来日したグロピウスを桂離宮に案内している。

『新版 桂離宮』では、「庭園における建築的意匠」に「庭園における間仕切の存在」が追加されており、はじめて出てきたテーマである。森は「戸外室」という大正期の生活改善運動における庭園改造の中で出てきた、建築と一体となった戸外の室としての庭園の考え方を、桂離宮の庭園に当てはめて考察しようとしている。また森はグロピウスが桂離宮の庭園の建築または自然物により切り取られた空間の面白さを讃えていたことを引用しつつ、周囲に樹木が密植されている賞花亭周辺、生垣によって新御殿の前面広庭や梅馬場からの見通しがさえぎられている笑意軒周辺、築山で区切った盆地状の小区域をさらに樹木で隠蔽し蘇鉄山や紅葉山で池の水面から完全に遮断された外腰掛周辺などは、「庭園における間仕切の存在」によって各々独立した小天地を形成していると指摘している。

また、松琴亭にむかって石橋を渡らずに卍字亭に向かって進むとすると、飛石のひとつが手前のものより30cm、向こうのものより25cmも高く据えられており、これを森は景観を損なうことがない観念的な間仕切であると考えている。森が庭園における建築的意匠として物理的に空間を分ける間仕切りだけではなく、眺望は生かしながら人の意識の上で空間を分ける観念的な間仕切りについての考察を行っており、そこには森の建築と庭園の結びつきの視点をみることができる。

3.1.8. 丹下健三の桂離宮意匠論 1960（昭和35）年に発行された『桂：日本建築における伝統と創造』のなかの「日本建築における伝統と創造-桂」⁽²⁶⁾において、丹下健三は一人の建築家として桂離宮を見、桂離宮のなかに自由な創造精神を認めているとしている。

丹下は、桂離宮の建築と庭園の空間について、平面のパターンは横に拡がって空間を分節していくが、そこにあらわれる空間は、内に空間性を持ち、外に質量感をともなうような有機的統一のある空間ではなく、二次元的空間の時間的連続として展開していくとしている。桂離宮にみられる空間の概念も、自然の中にあるところの空間の概念であって、自然に対するような空間ではなく、時間の流れにそって始めてヴィスタとか、コンティニューイティとかパー

スペクティブといった空間表現をともなって展開されていき、この空間の流れはどこまで行っても一つの全体という観念に達することがない、瞬間的な、移ろい易い、はかない印象の連続にすぎず、全体に統一を与える不易の強靱な緊張に欠け、時間を固定させるような記念碑的性格などは現れてくることがないとしている。

丹下は、上層文化の伝統の形式という弥生的な文化形成の伝統と、下層文化の伝統の形成という縄文的文化生成のエネルギーという、日本建築の伝統の二つの系譜が桂離宮に自由な精神をみなぎらせ、桂離宮の創造性をさらに緊張したものにしていると考えている。丹下はそこに見られる伝統と破壊のディアレクティブな統一が創造の構造であると指摘している。

3.2. 西澤文隆以前の桂離宮意匠論における建築の視点

ここまでの桂離宮意匠論により、岸田による桂離宮の建築と庭園を造形と構成としてみる試み、タウトによる建築と庭園を一体として多面性と無数の関連の美とする捉え方、柳の建築から見る美しさと庭園から見られる美しさとを同時に把握し同時に解決する点に、それぞれ桂離宮の建築と庭園を一体として捉える視点があったことがわかる。

さらに、藤島は桂離宮の庭園が極めて建築的であると指摘していた。また、堀口は建築的手法を用いて実用的につくられているところに着目し、桂離宮の建築と庭園の美を見出していた。グロピウスは、桂離宮の建築も庭園も一つの連続した空間構成であり、屋外における建築または自然物により切り取られた空間の面白さがあり、空間が流動しているとしていた。これらには、桂離宮の建築と庭園を一体として捉えた上で、建築と庭園をひとつの連続した空間とし、さらに桂離宮の庭園を建築的に捉える視点があったことがわかる。

その上で、森はこれらの影響を受けて、桂離宮の庭園を「建築と庭園の実用性」、「庭園における建築的意匠」、さらに「庭園における建築的意匠」に「庭園における間仕切の存在」という建築と庭園の結びつきの視点からその特徴を明らかにしようとしていた。丹下は、桂離宮の建築と庭園の空間について、平面のパターンは横に拡がって、空間を分節し、二次元的空間の時間的連続として展開していくとしていた。

これらに共通して見られるのは、桂離宮の庭園を建築の視点から捉え考察するという点であり、西澤はこれらの桂離宮意匠論を背景として、桂離宮の建築と庭園を捉えていたと考えられる。

4. 西澤文隆の庭園研究における建築の視点

4.1. 西澤文隆の桂離宮意匠論

西澤には『桂離宮』と題する著書はないが、1976（昭和51）年に出版された『庭園論II』の中に「桂離宮」⁽²⁷⁾の文章がある。西澤の『庭園論II』および『庭園論III』のなかの日本庭園の実例解説にあって、「桂離宮」が最も多くのページにわたって解説されており、西澤の庭園研究の中でも桂離宮を重要視していることがうかがえる。

「桂離宮」で、西澤は古書院の建築と庭園の関係について、障子を開放すれば室と庭が連続して一体化するとし、建築と庭園の結びつきの視点を持っていたことがわかる。

また、西澤は景を区切ってゆく技法が桂離宮ほど徹底しているものはないとして、桂離宮の庭園の各部分が生垣や塀などで囲われている状態を、建築内の室と同様のものとしての「戸外の室」とみなしている。

西澤は、御幸道の空間、月波楼から続く苑路、古書院・玄閣・中門・塀で囲まれた空間、月波楼の山上、紅葉の馬場、外腰掛待合の庭、鼓瀧下方の石橋周辺、万字亭を含む橋から橋まで、水路の北西の橋から石の一本橋まで、賞花亭附近、園林堂の区域、笑意軒の区画などをそれぞれ一室と捉えている。

また、西澤は囲われた室とともに、苑池を楽しむ開けた空間をホールと呼び、特に松琴亭の手前の山際を苑池沿いに進む、石橋までの開けつくした空間を、建築で言えば中央ホールとみなしている。その一方で西澤は、細長い苑路を廊下的空間としている。

さらに、西澤は室やホール、廊下とともに飛び石の高さによる区切り・区画にも言及している。この考え方は西澤の文中にもあるように森が発見したもので、西澤が森の桂離宮意匠論を参考にしていたことがわかる。

なお、西澤は「桂離宮」のなかで、古書院外側の障子や雨戸、竹林亭の推定位置、御池の石組を見る位置、旧河床についてなどに関しても森の研究を引用して解説をしており、西澤が森の研究を評価していたことがわかる。

4.2. 西澤文隆の桂離宮意匠論における建築の視点

西澤の桂離宮の庭園を室やホール、廊下として建築と庭園の全体を建築的に捉える視点は、森による桂離宮の「庭園における建築的意匠」の「庭園における間仕切の存在」という考え方の影響を受け、さらにそれを発展させて、室だけではなくホールや廊下とみなすことで、桂離宮の敷地全体を生活のための空間として建築的に捉えたものである。

西澤は『庭園論』の「開くことと閉ざすこと-建築と庭のかかわり」⁽²⁸⁾において、廻遊式庭園の庭はいくつもの庭に分割されており、それらは書院造りにおける室と室との関係のようにお互いに隣合せに連なっているとし、書院造りの各室を仕切る襖の役を果たすのが生垣や木の茂みや築山であるとしている。

さらに、西澤はそれらの仕切りはあたかも結界のように完全に遮断しないで遮断効果を十分に果たしているものであると指摘している。こうした一見囲っていると気をつかせない囲いのなかであって庭はひとつのまとまりのある演出がなされていることは、襖や障子と床書院で囲まれてまとめられている書院の室内に似ていると考えている。

その上で、庭全体が一つの拡がりを見せるのは極所極所で池泉に出て池泉を見晴らすときであり、ここは建築における大ホールであり、アクセス・ホールの空間であるとしている。

この西澤の桂離宮の建築と庭園の全体を生活空間として建築的に捉える視点は、西澤以前の建築研究者や建築家、庭園研究者などが著した桂離宮意匠論の影響を直接的、あるいは森を通して間接的に受けているものであり、そこには西澤の庭園研究における建築の視点を見ることができる。

4.3. 敷地全体に住む

1961（昭和36）年7月発行の雑誌『インテリア』に、西澤の「庭とガラスで生かされた住まい / 宮本邸」⁽²⁹⁾という文章が掲載されている。宮本邸は坂倉準三建築研究所大坂

支所長であった西澤が、コート・ハウスの手法を用いて設計した初期の住宅である。

西澤は、住宅を設計する時に敷地の広さが十分でない場合には、敷地全体を建築と考え、区切られた空地为各室同様に敷地全体にばらまくことにより、庭と各室を一体化しながら開放的でプライバシーを保つ住宅を設計するとし、樹木は庭を構成するほかに、プライバシーを保つためのスクリーンの役目をも果たさせると考えている。

さらに続けて、森が発見したこととして、桂離宮の庭は修学院の場合と異なり、敷地全体が広いにかかわらず各部に庭園を区切っていき、ちょうど建物全体の中に各室が具合よく配置されるように、幾つもの庭が案配されているとし、これは廻遊式庭園の場合の一つの総合かもしれないしつつ、桂離宮の場合にはそれを意識し、何気なく置かれている石がスクリーンの役目を果たし、これはスクリーンのないスクリーンであるとしている。

その上で、宮本邸の建築と庭園について、西澤が試みているのは建具のスクリーンで囲われた室としての庭であり、狭い室を広く感じさせる庭であり、多湿なわが国土に適した通風をよくするための庭であるとしている。

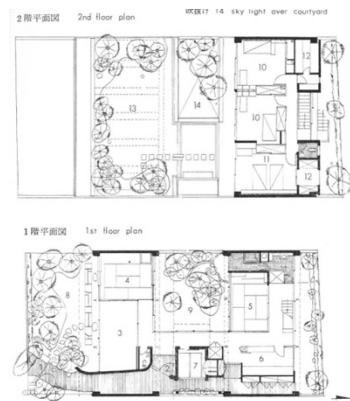


Fig.3 Miyamoto's Residence

ここでは、桂離宮意匠論にみられた建築と庭園の全体を生活空間として建築的に捉えるという西澤の庭園研究における建築の視点が、住宅設計における敷地全体に住むという西澤の考え方に通じるものであることがわかる。

5. まとめ

本稿では、桂離宮意匠論に着目することで、西澤の庭園研究における建築の視点の特質を明らかにしてきた。

西澤の庭園研究には、日本庭園研究者で作庭家の森との交流が影響しており、また西澤の桂離宮意匠論には西澤以前の建築研究者や建築家、庭園研究者などが著した桂離宮意匠論の影響を直接的、あるいは森を通して間接的に受けていた。そこには、桂離宮の建築と庭園を一体として捉えた上で、建築と庭園をひとつの連続した空間とし、さらに桂離宮の庭園を建築的に捉える視点が、西澤はそれらを発展させて、桂離宮の建築と庭園の全体を生活空間として建築的に捉えていたことがわかった。

そして、西澤の庭園研究における建築の視点は、西澤の住宅設計における敷地全体に住むという考え方に通じ、コート・ハウスの手法を用いた西澤の初期の住宅設計に生かされていたことがわかった。

なお、本研究は科学研究費助成事業 基盤研究(C) 課題番号 22K12693 (2022~2024 年度) の助成を受けて行っているものである。

注1) 桂離宮意匠論という用語は、森蘊：桂離宮，東都文化出版，239，1955. において用いられている。

注2) 森蘊の建築と庭園の結びつきの視点に関しては、筆者による以下の研究がある。

田中栄治：森蘊における建築と庭園の結びつきの視点，森蘊研究成果報告書 昭和の作庭記 森蘊の業績と日本庭園史の作成，綴水社，75-92，2020.

田中栄治：日本庭園史研究における建築と庭園の結びつきの視点：森蘊による日本庭園通史を通して，関西国際大学研究紀要，22，71-88，2021.

田中栄治：森蘊における建築と庭園の結びつきの視点 小堀遠州の伝記を通して，神戸山手大学紀要，21，27-43，2019.

田中栄治：建築と庭園における意匠心 -森蘊と谷口吉郎の修学院離宮意匠論-，神戸山手大学紀要，20，47-73，2018.

田中栄治：建築と庭園の結びつきの視点 森蘊と堀口捨己・西澤文隆の桂離宮意匠論，神戸山手大学紀要，19，69-104，2017.

田中栄治：庭園研究者・造園家 森蘊と建築家 谷口吉郎 昭和前半期における建築家と造園家の交流，神戸山手大学紀要，18，59-87，2016.

田中栄治：住宅における建築と庭園 庭園研究者・造園家 森蘊と建築家 堀口捨己・西澤文隆，神戸山手大学紀要，17，9-40，2015.

出典

Fig.1 足立裕司：正面のない家／その位相-自然，庭，住まい，そして都市，坂倉建築研究所 アソシエイツのたち 新建築 1999年9月臨時増刊号，第74巻10号，新建築社，172，1999.

Fig.2 西澤文隆：西澤文隆小論集3 庭園論II 日本文化のなかで，相模書房，438-439，1976.

Fig.3 西澤文隆：庭とガラスで生かされた住まい / 宮本邸，インテリア 1961年7月号，第10号，日本室内設計研究所，21，1961.

文献

- (1) 西澤文隆：庭への履歴書，庭 1978年4月号，第39号，建築資料研究社，74-79，1978.
- (2) 金澤良春：両界曼荼羅 -「設計と実測」あるいは「坂倉準三と西澤文隆」-，日本の建築と庭 西澤文隆実測図集 解説編，西澤文隆実測図集刊行会，中央公論美術出版，36-47，2006.
- (3) 森蘊，恒成一訓(写真)：日本の庭，朝日新聞社，1960.
- (4) 西澤文隆：西澤文隆小論集1 コートハウス論 その親密なる空間，相模書房，1974.
- (5) 西澤文隆：西澤文隆小論集2 庭園論I 庭-その華麗な

- るもの，相模書房，1975.
- (6) 西澤文隆：西澤文隆小論集3 庭園論II 日本文化のなかで，相模書房，1976.
- (7) 西澤文隆：西澤文隆小論集4 庭園論III 続・日本文化のなかで，相模書房，1976.
- (8) 西澤文隆：私の感銘の受けた図書，建築雑誌 1978年10月号，Vol.93 No.1142，日本建築学会，7，1978.
- (9) 森蘊：日本の庭園，吉川弘文館，1964.
- (10) 森蘊：桂離宮，東都文化出版，1955.
- (11) 岸田日出刀：過去の構成，構成社書房，1929.
- (12) 森蘊：建築と庭園の結びつきを求めて，建築雑誌 1983年9月号，Vol.98 No.1211，日本建築学会，20，1983.
- (13) ブルーノ・タウト：桂離宮，ニッポン，明治書房，23-42，1934.
- (14) ブルーノ・タウト：日本建築の世界的奇蹟，桂離宮 タウト著作集第一集，育成社，35-51，1946.
- (15) 柳亮：眞の飛び石 桂離宮の覚え書から，日本美の創生，育生社弘道閣，187-213，1942.
- (16) 藤島亥治郎：桂離宮，番町書房，1945.
- (17) 森蘊：庭ひとすじ，学生社，13，1957.
- (18) 森蘊：日本の庭園 創元選書 259，創元社，あとがき，1957.
- (19) 森蘊：庭ひとすじ，学生社，30，1973.
- (20) 堀口捨己：桂離宮，毎日新聞社，1952.
- (21) 森蘊：新版 桂離宮，創元社，319，1956.
- (22) 森蘊：グロピウス博士の日本観 -京都の古建築庭園について-，グロピウスと日本文化，彰国社，140-147，1956.
- (23) ワルター・グロピウス：日本における建築，桂：日本建築における伝統と創造，造型社，9-17，1956.
- (24) 森蘊：桂離宮，創元社，1951.
- (25) 森蘊：新版 桂離宮，創元社，1956.
- (26) 丹下健三：日本建築における伝統と創造-桂，桂：日本建築における伝統と創造，造型社，20-48，1956.
- (27) 西澤文隆：桂離宮，西澤文隆小論集3 庭園論II 日本文化のなかで，相模書房，409-484，1976.
- (28) 西澤文隆：開くことと閉ざすこと-建築と庭のかかわり，西澤文隆小論集2 庭園論I 庭-その華麗なるもの，相模書房，23-100，1975.
- (29) 西澤文隆：庭とガラスで生かされた住まい / 宮本邸，インテリア 1961年7月号，第10号，日本室内設計研究所，21，1961.